

ハラハラどきどき核入れ

桐谷次郎・県教育長が初視察

名向小学校5年生がこのほどNPO法人小パール隊の指導を受けながら初めての真珠の核入れ作業に挑戦した。核入れされた母貝のアコヤガイは来年春頃まで小網代湾のイカダで眠り、真珠を育むことになった。核入れの模様を県教育委員会・桐谷次郎教育長が熱心に視察した。

核入れを行ったのは1組と2組の52人。冒頭、小パール隊の日高芳子さんが核となるプラスチック玉の入れる場所や真珠ができる仕組み、真珠を育む海の環境保護などを解説。4つのグループに分かれて核入れの手術を行った。

真珠はアコヤガイが核と



が幾層もの真珠層で包み込み、もうとする性質を利用して人工的に作り出すもの。真珠層は炭酸カルシウムでできており、核と一緒にくっつけたピース(細胞)を入れる作業が核入れと呼ばれている。核入れされたアコヤガイは海の中で半年ほど過ごし、ピースの細胞ほとんどん成長して増え続け、核の周りを次第に包み込んでいく。

核入れを行った實重依梨花(さねしげえりか)さんは、

「貝の中にピースが落ちてしまい難しかった。小パール隊のアドバイスでうまく核入れができました」と緊張の作業を振り返っていた。

作業を見守った桐谷教育長は各テーブルを回りながら解説に耳を傾け、作業にあたる児童たちの手先に見入っていた。県教育長が海洋教育の現場を視察するのは初めてで、この後、吉田英男市長、三壁伸雄教育長と海洋教育をテーマに意見を交換したという。

【写真】5年生の核入れ作業と核入れを視察した桐谷次郎・県教育長(左)

